『ゴーラクナート語録』研究

「パド：ラーグ・ラーマグリー」(11 – 32) の本文と和訳

橋　本　泰　元

はじめに

本稿は『東洋学論叢』第 36 号の拙稿に引き続いて、Pītāṃbaradatta Baṛathvāla, *Gorakha-Bānī*, Prayāga:Hīndī Sāhitya Sammelana, 2017 (=1960, tritīya saṃskaraṇa) [prathama saṃskaraṇa 1942] 所収の、ゴーラクナートによる教説の詠歌パド (pada) の本文を提示しその和訳を行う。この詠歌パドは、音楽の旋律ラーグ (rāga) の名の下に次のように分類されている。

rāga-rāmagrī : 1-32 篇、rāga-āsāvarī：33-48 篇、rāga-rāmagarī：49-60 篇、āratī：61-62 篇。

本稿では、紙幅の都合によりこのうち、rāga-rāmagrī：11-32 篇を扱う。なお、前号と同様に、訳文中の（　）は筆者の言い換え、〔　〕内は筆者による補足を、＊は筆者の訳注を示す。

本文と和訳

avadhū bolyā tata bicārī pṛthvī maiṁ bakabālī /
aṣṭakula parabata jala bina tiriyā adabuda acambhā bhārī // ṭeka //
遁世者は熟考して真実を語った、〔その真実語は〕世間では無駄口。
〔第一に〕八族の山が水がなくても流れてしまい、たいへん驚いた。＊

「八族」の原語 aṣṭakula は、HŚS によれば、プラーナ聖典の記述で、蛇 Śeṣa, Vāsuki, Kambala, Karkoṇṭika, Padma, Mahapadma, Śaṅkha, Kulika とあるが、*Puranic Encyclopedia* では aṣṭanāga という見出し語になっている。原著者はこの語彙に説明を加えていないが、「山」を「身体」、「水」を微細なマーヤーの比喩と理解している。

（16）

mana pavana agama ujāliyā ravi sasi tāra gayāī /
tīni rāja trividha kula nāṁhīṁ cāri juga sidhi bāī // 1 //
〔第二に〕心（意）が気息の到来によって輝き、太陽、月、星は消えた。
〔第三に〕三種〔３グナ〕の支配による家がなくなり、第四に世界に成就〔の法螺〕が鳴った。

pāṁca sahaṁsa maiṁ ṣaṭa apūṭhā sapta dīpa aṣṭa nārī /
nava ṣaṇḍa pṛthī ikabīsa māṁhīṁ ekādasi eka tārī //
第五がサハスラーラ〔・チャクラ〕に〔確立し〕、第六に〔甘露が〕逆流し、第七に燈明〔が点り〕、第八に女（クンダリニー・シャクティ）が〔起った〕。
九つの州、地球、２１〔の梵卵〕のなかで第 11 日目に、三昧専一〔が成った〕。

dvādasī trikuṭī yalā piṅgulā cavadasi cita milāī /
ṣoṛasa kavala dala sola batīsau jurā marana bhau gamāī // 2 //
第 12 日目に眉間でピンガラー〔脈管がスシュムナー脈管に〕到達し、第 14 日目に心が〔ブラフマンに〕冥合した。
〔望月・朔月に〕１６連弁〔のヴィシュッダ・チャクラが成就し、ヨーガ行者は〕３２〔の相好を獲得して〕、老、死、生〔の苦しみ〕が滅した。

dasavaiṁ dvāra nirañjana unamana bāsā sabadaiṁ ulaṭi samāṁnāṁ /
bhaṇanta goraṣanātha machīndra nāṁ pūtā abicala thīra rahāṁnāṁ // 3 // // 11 //
第 10 の門に無垢なる者（絶対者）がウンマナー（究極の状態）で住し、「ことば」のなかに逆転して収まった。
マッツェーンドラの息子ゴーラクナートは語る、〔私は〕不動の状態となったと。

oṃ namo sivāi bābū oṃ namo sivāi /
aha nisi bāi mantra kauṇeṁ re upāi //
オーム、シヴァ神に帰命頂礼、オーム、シヴァ神に帰命頂礼。

昼夜、呼吸気〔とともに念誦する〕マントラは、誰がつくったのか。

bhyaṁne bhyaṁne aṣyare je devai re bujhāi,
tākā maiṁ celā bābū so gurū hamāra // ṭeka //
さまざまな文字で説いてくれる者、
私はその人の弟子、その人が私の導師。

oṃkāra āchai bābū mūla mantra dhārā oṃkāra byāpīle sakala saṃsārā /
oṃkāra nābhī hṛdai deva gura soī oṃkāra sādhe binā sidhi na hoī // 1 //
聖音オームはマントラの流れの根源、聖音オームは全世界に広まった。
聖音オームは臍輪、心臓〔に住し〕神、導師〔であり〕、聖音オームを修しなければ成就はない。

nādaiṁ līna brahmā nāṁdaiṁ līnā nara hari
nādaiṁ līnā ūmāpatī joga lyau dhari dhari /
nāda hīṁ tau āchai bābū saba kachū nidhāṁnāṁ
nāda hīṁ thaiṁ pāiye parama niravāṁnāṁ // 2 //
ナーダにブラフマー神は冥合し、ナーダにヴィシュヌ神は冥合し、ナーダにウマー妃の夫（シヴァ神）は冥合した、〔ナーダを〕捉えヨーガに専念して。
ナーダこそがあらゆるものの拠り所、ナーダによって至高の涅槃が得られる。

bāī bājai bāī gājai bāī dhuni karai
bāī ṣaṭa cakra bedhai aradhaiṁ uradhaiṁ madhi phirai /
sohaṃ bāī haṃsā rūpī pyaṇḍa bahai
bāī kai prasādi byanda guramuṣa rahai // 3 //
気息が鳴り気息が轟き気息が音調をなし、気息が６チャクラを貫き上中下と動き回る。
「ソーハン、ハンサ」という気息が身体を流れ、気息の恩寵によってビンドゥは導師に面座する。＊

「ソーハン、ハンサ」の原語 so'haṃ haṃsa は「それは我なり、ハンサ鳥なり」の意味でヨーガ行の究極の境地を象徴しているマントラとされている。また、通常の呼吸気をも意味していて、したがってヨーガ行者は日常の呼吸によって常にこのマントラを念誦しているものと考えられている。「導師に面座する」の原語 gurumukha は「導師によって入門許可された」の意味。原著者は、後半句の意味を、「ビンドゥ」がハタヨーガ説では「精液」を意味するので、それが身体の頂孔（ブラフランドラ）に到達したことと解釈している。

nama mārai mana marai mana tārai mana tirai /
mana jai asthira hoi tṛbhuvana bharai /
mana ādi mana anta mana madhaiṁ sāra /
mana hī taiṁ chūṭai bābū viṣāiṁ vikāra // 4 //

心が殺し、心が死に、心が救い、心が救われる。心が不動になれば、三界は満たされる。
心が初めに、心が終わりに、心が中に〔にある〕精髄。心からこそ毒が放たれる。

sakti rūpī raja āchai siva rūpī byanda /
bāraha kalā ravi āchai solaha kalā canda /
cāri kalā ravi kī je sasi dhari āvai /
tau siva saktī saṁmi hovai anta koī na pāvai // 5 //

血液がシャクティそのものでありビンドゥがシヴァそのもの、１２カラーは太陽で、１６カラーは月。
太陽が４カラーで月が〔それを〕保てれば、シヴァとシャクティは合一し、〔その〕終わりはなし。

「カラー」の原語 kalā は、一般的には月の朔あるいは望になる時間の単位で１６で満数を表す。太陽が１２カラーであるとは、HŚS の記述によれば黄道１２宮への移行 (saṃkrānti) に従った太陽の様態と名称。第２行目の前半句の意味が明瞭でいない。原著者は１２カラーの太陽は会陰部にあるムーラーダーラ・チャクラに存する甘露の吸収者、１６カラーの月は頭頂にあるサハスラーラ・チャクラに存する甘露の放出者の象徴表現と理解し、第２行目前半句を「太陽のカラーが強い、すなわちシャクティ（＝マーヤー）が力強いので、４カラー

の太陽が月と合一すれば」と解釈している。

ehī rājā rāma āchai sarve aṅge bāsā / yehī pāñcauṁ tata bābū sahaji prakāsā /
ye hī pāñcauṁ tata bābū samajhi samāṁnāṁ /
badanta goraṣa ima hari pada jāṁnāṁ // 6 // // 12 //
これこそがラーム王であり、すべての支分に住し、この５原理が自然に放光する。
この５原理を理解し冥合すれば、ゴーラクは言う、かくして神の境地を知る。

avadhū jāpa japau japamālī cīnhauṁ jāpa japyāṁ phala hoi /
agama jāpa japīlā goraṣa cīnhata biralā koī // ṭeka //
遁世者よ、念誦をせよ、〔本物の〕念誦者を見極めよ、念誦をすれば功徳が得られる。
ゴーラクは困難な念誦を行った、稀なる者が〔このことを〕知っている。＊

japamālī を原著者は翻訳していない。この複合語の後半 -mālī は「輪を持つもの」の意味が HŚS にあり、それに従って「念珠を持つ者」の意味に解釈した。

kavala badana kāyā kari kañcana cetani karau japamālī /
aneka janama nāṁ pāriga chūṭai japanta goraṣa cavālī // 1 //
漱口水を口に、身体を無病にして、意識を念誦者にせよ。
転生の罪障が除かれる、卑しいゴーラクは念誦しつつ〔語る〕。＊

第１行前半句を原著者は「蓮華（チャクラ）を口にせよ、身体は黄金で意識が念珠である」と解釈しているが、意味が通りにくいように思われる。HŚS に kavala の意味に「水や食物の一口」があり、また kañcana に「無病の」という形容詞の意味があるので、それに従った。

eka aṣīrī ekaṅkāra japīlā sunni asthūla doi vāṁṇī /
pyanḍa brahmāṇḍa saṁmi tuli byāpīle eka aṣirī hama guramuṣi jāṁṇīṁ // 2 //
一文字、一形相〔のマントラを〕念誦した、空（くう）と粗大の二つの音声で。

肉体と梵卵が〔互いに〕等しく遍充した、一文字〔マントラ〕を私は師の御口から学んだ。＊

第 1 行後半句は、内面的な無声の音声と外面的な有声の音声で念誦した、の意味。

dvai aṣirī doī paṣa udhārīlā nirākāra jāpaṁ japiyāṁ /
je jāpa sakala siṣṭi utapaṁnāṁ te jāpa śrīgoraṣanātha kathiyāṁ / 2 /
二文字〔のマントラ〕で二つの側をすくい上げた、無形相〔のマントラ〕を念誦して。
全世界を生んだ念誦を聖ゴーラクナートは語った。

第 1 行目前半句の「二つの側」を原著者は、「此界・他界」「無属性・有属性」「微細・粗大」と解釈している。

tri aṣirī trikoṭī japīlā brahmakuṇḍa nija thāṁnaṁ /
ajapā jāpa japantā goraṣa atīta anupama gyāṁnaṁ / 4 /
三文字〔のマントラ〕を眉間で念誦した、〔そこは〕ブラフマンの井戸であり〔アートマンの〕本居なり。
命息念誦をして、ゴーラクは無上で無類の知識〔を得た〕。＊

命息念誦 ajapā jāpa については、上記 12-3 の注を参照。

cau akṣirī catura veda thāpilā cāri ṣoṁṇī cāri vāṁṇī /
machindra prasādaiṁ jatī goraṣa bolyā ajapā japilā dhīra rahāṁṇī / 5/ // 13 //
四文字〔のマントラ〕が四ヴェーダをつくった、四種の生類と四種の音声を。
マッツェーンドラの恩恵を得て行者ゴーラクは語った、命息念誦をして不動で居れと。＊

ṣoṁṇī は判読不可能であるが、原著者は khāni と読み、udbhijja（地生）、ūṣmaja（湿生）、aṇḍaja（卵生）、piṇḍaja（胎生）、すなわち生類一切と解釈しているので、

それに従った。cāri vāṁṇī を原著者は四種類の語録と解釈し名称を挙げているが、意味が不明であるので、「四種の音声」、すなわち生類の声と解釈した。

rami ramitā sau gahi caugāṁnaṁ kāhe bhūlata hau abhimāṁnaṁ /
dharana gagana bici nahīṁ antarā kevala mukti maidāṁnaṁ // ṭeka //
〔自らの最高の境地を〕享受している者（ラーム）とポロの試合をせよ、
なぜ驕りに酔っているのか。
大地と虚空の間に相違はない、独存の解脱の平野なのだから。

eka maiṁ ananta ananta maiṁ ekai ekai ananta upāyā /
antari eka sauṁ paracā hūvā taba ananta eka maiṁ samāyā / 1 /
一に無限、無限に一、一が無限を生んだ。
内面で一を覚知して、無限は一に収斂した。

aharaṇi nāda naiṁ byanda hathauṛā ravi sasi ṣālāṁ pavanaṁ /
mūla cāpi ḍiḍḥa āsaṇi baiṭhā taba miṭi gayā āvāgavanaṁ / 2 /
金床がナーダでビンドゥが金槌、太陽と月が空気を送るふいご。
会陰部を抑えて堅固な坐を組んで、去来が消えた。

原著者は「太陽」をイラー脈管、月をピンガラー脈管と、ハタヨーガの伝統説に従って解釈している。

sahaja palāṁṇa pavana kari ghoṛā lai lagāṁma cita cabakā /
cetani asavāra gyāṁna gurū kari aura tajau saba ḍhabakāī / 3 /
自然（じねん）（サハジャ）を鞍に気息を馬にして、冥合を手綱に心を鞭にして。
意識を騎士にして知識を導師となせ、そしてすべての方便を捨てよ。

tila kai nākai tṛbhavana sāṁdhyā kīyā bhāva vidhātā //
so tau phira āpaṇa hīṁ hūvā jākauṁ ḍhūṁḍhaṇa jātā / 4 /
胡麻粒ほどの鼻先に三界を狙い定めると、創造者の感情が湧いた。
すると、それが自分となった、それを探し求めに行ったのに。

āsti kahūṁ tau koi na patījai bina āsati kyūṁ sīdhā /
goraṣa baulai suṇau machindra hīrai hīrā bidhā / 5 / // 14 //
私が実在と言うと誰も信ぜず、実在でなければ、どうして成就しようか。
ゴーラクは言う、聞け、マッツェーンドラよ、金剛石は金剛石によって貫かれる。

tata baṇijīlyau tata baṇijīlyau jyūṁ morā mana patiyāī // ṭeka //
真実の商いをせよ、真実の商いをせよ、私の心が信じているように。

sahaja goraṣanātha baṇija karāī pañca balada nau gāī /
sahaja subhāvai vāṣara lyāī more mana uṛiyāṁnī āī / 1 /
ゴーラクナートは自然（じねん）〔の知識〕の商いをしている、五頭の雄牛と九頭の雌牛を。
〔その牛たちは〕自然の本性をし、干し草も持ってきた、私の心は飛び立ちだした。

surahaṭa ghāṭa amhe baṇijārā suṁni hamārā pasārā /
leṇa na jāṇauṁ deṇa na jāṇauṁ　bajaṇa hamārā / 2 /
高い所の、私は商い人、私は空（くう）を広げた。
私は買うことも知らず売ることも知らない、私の商いはこのようなもの。*

第 1 行目の surahaṭa は一語で辞書に見当たらないが、複合語と捉えると「神の市場」と考えられる。しかし surahaṭa ghāṭa の意味は、原著者の解釈に従った。edvā についても同様である。

bhaṇanta goraṣanātha machindra kā pūtā edvā baṇija nā arathī /
karaṇīṁ apaṇīṁ pāra utaraṇāṁ bacane leṇāṁ sāthīṁ / 3 / // 15 //
マッツェーンドラの弟子ゴーラクナートは語る、商いとはこのような意味ではない。
〔正しい〕行いを自分のものとし、〔導師の教えの〕ことばを友とせよ。

māṁharā re bairāgi jogī ahanisi bhogī jogaṇi saṅga na chāṛai /

mānasarovara mamasā jhūlantī āvai gagana maṇḍala maṭha māṁḍai re // ṭeka //
私の離欲者・ヨーガ行者は、昼夜、享楽に〔沈潜し〕、女性ヨーガ行者との同伴を止めない。
マーナサローヴァラ湖にマナサー女神が揺れながらやって来て、虚空を音もなく覆う。＊

原著者はマーナサローヴァラ湖を「心」、マナサー女神を「意欲」、虚空を「（頭孔）ブラフマ・ランドラ」の象徴表現と解釈している。プラーナ聖典によれば、マナサーは Jagatkāru Muni の妻、Āstīka の母、Kaśyapa の娘、Vāsuki 蛇神の妹とされている。

kauṁṇa asthāṁniki torā sāsū naiṁ susarā kauṁṇa asthāṁna ka torā bāsā /
kauṁṇa asthāṁnaka tū nai jogaṇī bheṭī kahāṁ milyā ghara bāsā / 1 /
〔ヨーガ行者よ〕どの地方の人だ、おまえの舅・姑は、どの地方だ、おまえの住居は。
どの地方でおまえは女ヨーガ行者と会ったのか、〔おまえの〕家・住居はどこで得たのか。

nābha asthāṁnaka morā sāsū naiṁ susurā brahma asthāṁnaka morā bāsā /
ilā pyaṅgulā jogaṇa bheṁṭī suṣamana milyā ghara bāsā / 2 /
臍輪という地方に私の舅・姑〔がおり〕、ブラフマーという地方が私の住居。
イラー脈管とピンガラー脈管が合流する、スシュムナー脈管が〔私の〕家・住居。

kāṁma krodha bālī chūṁnāṁ kīdhā kandrapa kīyā kapūraṁ /
mana pavana do kātha supārī unamanīṁ tilaka sīndūraṁ / 3 /
愛欲・瞋恚を粉々にして、愛神カーマを樟脳にして〔燃やした〕。
心と気息ふたつは阿仙薬と檳榔樹の実〔となり〕ウンマニー（究極の境地）が辰砂の印〔なった〕。＊

阿仙薬（カテキュー）と檳榔樹の実（ビンロウジの小刻）は、キンマの葉に包

んで噛む口内清涼剤であり嗜好品の、現代語でパーンという。辰砂の印とは、伝統的には既婚のヒンドゥー女性が髪の分け目に塗る印。

gyāṁna gurū doū tūbā amhāre manasā cetani ḍāṁḍī /
unamanī tāṁtī bājana lāgi yahi vidhi tṛṣṇāṁ ṣāḍīṁ / 4 /
知識と導師ふたつは私の瓢簞〔で作った弦楽器〕、心と意識は〔その弦楽器の〕棹。
ウンマニーの弦が鳴り始め、こうして渇愛を砕いた。

eṇa sataguri amhe paraṇāṁbyā abalā bāla kuvāṁrī /
machindra prasāda śrīgoraṣa bolyā māyā nāṁ bhau ṭārī / 5 / // 16 //
このように正師は私を救い出してくれた、ひ弱き幼い乙女（マーヤー）から。
マッツェーンドラ師の恩恵で聖ゴーラクは語った、マーヤーの恐れが遠ざかった。

tata belī lo tata belī lo lo avadhū goraṣanātha jāṁṇīṁ /
ḍāla na mūla pahupa nahīṁ chāyā birādhi karai bina pāṁṇī // ṭeka //
真実のベルノキを、真実のベルノキを、遁世者よ、ゴーラクナートは知っている。
〔そのベルノキは〕枝も根も花も影もなく、水もないのに大きくなる。

kāyā kuñjara terī bāṛī avadhū satagura beli rupāṁṇīṁ /
puriṣa pāṁṇatī karai dhaṇiyāṁnauṁ nīkaiṁ bāli ghari āṁṇī / 1 /
身体の木立がおまえの庭だ、遁世者よ、〔そこに〕正師がベルノキを植えた。
プルシャは穀物〔畑〕に水をやり、良く実った穂を家に持ち帰る。*

pāṃṇatī は pānī´ya (A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages) の記述をもとに推測すれば、pānī の派生語と考えられ、また dhaṇiyāṁnauṁ も dhānyà (A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages) の記述をもとに推測すれ

ば dhānya の派生語と考えられる。

mūla edvā jedvā sasihara avadhū pāṁna edvā jadvā bhāṁṇaṁ /
phala edvā jedvā pūnima candā jou jou jāṁṇa sujāṁṇaṁ / 2 /
〔その〕根は月のようで、遁世者よ、〔その〕葉は太陽のようだ。
〔その〕実は満月のようで、それを知る人は賢い人。

belaḍiyāṁ dauṁ lāgī avadhū gagana pahūṁtī jhālā /
jima jima belīṁ dājhabā lāgī taba melhai kūṁpala ḍālā / 3 /
〔この〕ベルノキに火がつき、遁世者よ、炎が大空に届く。
ベルノキに火がつくほどに、若葉と枝が揺れ出す。＊

第２行後半句は、原著者の解釈に従った。

kāṭata belī kūṁpala melhī sīñcataṛāṁ kuamalāye /
machindra prasādaiṁ jatī goraṣa bolyā nita navelaṛī thāye / 4 / // 17 //
ベルノキを切って若葉を採れば、水をやっても萎れる。
マッツェーンドラの恩寵で行者ゴーラクは言った、〔ベルノキを〕常に新鮮に保て。

baūjhau paṇḍita brahma giyāṁnaṁ gauraṣa bolai jāṇa sujāṁnaṁ // ṭeka //
理解せよ、パンディットよ、ブラフマンの知識を、賢い知者のゴーラクは語る。

bīja bina nisapatī mūla bina biraṣā pāṁna phūla bina phaliyā /
bāṁjha kerā bālūṛā pyaṅgula taravari caṛhiyā / 1 /
種子なく生え根なく樹が〔生えて〕、葉・花なく実がなる。
石女の子供、ピンガラー（太陽）が大樹に登る。

gagana binā candrama brāhmāṇḍa bina sūraṁ jhūjha bina raciyā thānaṁ /
e paramāratha je nara jāṁṇaiṁ tā ghaṭi parama giyāṁnaB / 2 /
大空のない月、梵卵のない太陽、争いのない戦場をつくる。

この真実義を知る人は、その身体に至高の知識〔が生ずる〕。

suṁni na asthūla lyaṅga nahīṁ pūjā dhuṁni biṁna anahada gājai /
bāṛī bina pahupa pahupa bina sāira pavana bina bhṛṅgā chājai / 3 /
〔それは〕空(くう)でも粗大でもなく、〔その〕徴表もプージャーもなく、音なく奏でられざる音が響く。
庭のない花、花のない海、風もなく蜂が輝きを放つ。＊

「海」の原語は sāira だが、意味が通じない。原著者は saurabha「芳香」の読みの可能性を指摘し、それに従っている。

rāha bina giliyā agani bina jaliyā ambara bina jalahara bhariyā /
yahu paramāratha kahau ho paṇḍita ruga juga syāṁma atharaban paṛhiyā / 4 /
ラーフ星がなくても蝕が起こり、火がなくても燃え、空がなくても雲が満ちた。
この真実義を言え、リグ、ヤジュル、サーマ、アタルヴァ〔の４ヴェーダ〕を学んだパンディットよ。

sasaṁmaveda sohaṁ prakāsaṁ dharatī gagan na ādaṁ /
gaṅga jamuna bica ṣelai goraṣa gurū machindra prasādaṁ / 5 / // 18 //
自ら理解できる（自内証）、「それは我なり」という思惟の光輝は、大地にも虚空にも水中にもなし。＊
ガンガーとヤムナーの間でゴーラクは遊んでいる、師マッツェーンドラの恩寵によって。

「水中」と訳した原語 ādaṁ は諸辞典に見当たらない。原著者は ārdra と読み替えて「水」の意味に解釈しているので、それに従った。

badanta goraṣanātha dasavaīṁ dvārī surga naiṁ kedāra caṛhiyā /
ikabīsa brhmaṇḍa nā siṣari ūpari sasamaveda ūcariyā　　ṭeka //
ゴーラクナートは語る、第１０門で天界のようなケーダーラ（シヴァ神の聖地）に登った。

２１の梵卵の頂点で、自ら理解できる（自内証）〔境地〕を説いている。

dvādasa dala bhīṁtari ravi saktī sasi ṣoṛasa siva thāṁnaṁ /
mūla sahaṁsara jīva siṁba ghari unamanī acala dhiyāṁnaṁ / 1 /
１２の蓮弁（カラー）のなかに太陽のシャクティ、月の１６〔カラーのなかに〕シヴァ神の住居がある。
ムーラ〔ーダーラ〕がサハスラ〔ーラに冥合し〕、個我がシヴァ〔の住居で〕ウンマニーなる不動の禅定に〔ある〕。

nāda anāhada garajai geṇaṁ pachima ūgya bhāṁṇaṁ /
dakṣiṇa ḍībī uttara nācai pātāla pūraba tāṁnāṁ / 2 /
虚空で奏でられざるナーダ（音）が、西に太陽が昇った。
南の女神（シャクティ）が北で踊り、地界は東に拡がる。＊

難解な詠歌である。原著者の解釈によると「眉間に奏でられざるナーダが鳴り響き、太陽がスシュムナー脈管に上昇してきた。南方すなわちムーラーダーラとスワーディシュターナ・チャクラに住すシャクティが北方すなわちブラフマ・ランドラで踊っている。地界すなわちスワーディシュターナの拡張が知識の起こる方角すなわちサハスラーラ・チャクラでおきている」。

canda sūra nīṁ mundrā kīnhīṁ dharaṇi bhasma jala melā /
nādī byandī sīṅgī ākāsī alakha gurū nāṁ celā / 3 /
月（イラー脈管）と太陽（ピンガラー脈管）を覆い、大地（俗世の塵）の灰を水に溶かした。
ナーダ、ビンドゥ、角笛、虚空、不可視なるものが導師の弟子〔となった〕。

tina sai sāṭhi thegalī kanthī ikavīsa sahaṁsa cha sai dhāgaṁ /
bahatari nāṛīṁ suī navāsī bāvana bīra sīyā lāgaṁ / 4 /
360 の継ぎ当て（骨）と襤褸衣（身体）、21,600 の糸（一日の呼吸）。
72 の脈管、98 の針、52 の耳飾りを縫い付けた。

ilī sodhi dhari pyaṅgulī pūrī suṣamanī caṛha asamāṁnaṁ /
machindra prasādai jatī goraṣa bolyā nirañjana sidhi naiṁ thānaṁ / 5 / // 19 //
イラー脈管を浄化してピンガラー脈管を満たせ、スシュムナー脈管を通って虚空に達せよ。
マッツェーンドラの恩寵で行者ゴーラクは告げた、ニランジャナ（無垢なるもの）の成就の場を。

āṁbaliyau thali mauriyau ūpari nīṁba bijaurai phaliyau /
so phala ṣātāṁ lāgai mīṭhau jāṁnai re jina guru prasādaiṁ dīṭhau // ṭeka //
マンゴーの花房が適所についたが、〔その〕うえにライムとシトロンの実がなった。
その実は食べるととても甘く、導師の恩寵によって見た者が〔それを〕知る。

ūṁṭa sicāṇaiṁ jaba grahyau jāi kairo ḍālī baiṭhau /
bāṁjhai beṭā janamiyūṁ naiṇaiṁ puriṣa na dīṭhau / 1 /
駱駝はオオタカに捕まえられると、棘の生えた枝に坐った。
石女が子供を産んだ、目で夫を見なかった。

lākaṛa ḍūbai sila tirai deṣatāṁ jaga jāi /
ūṭa pranālai bahi gayo susilyo paulī na māi / 2 /
丸太が沈み、石が浮かんで、見る間に世界が消える。
駱駝が水路に流され、ウサギは門に入れない。＊

「ウサギ」の原語 susilyo は諸辞典に見当たらない。原著者は kharahā と想定しており、それに従った。

ḍūgari maṁchā jali susā pāṁṇīṁ maiṁ dauṁ lāgā /
arahaṭa bahai tusālavāṁ sūlai kaṁṭā bhāgā / 3 /
丘のうえに魚、水のなかにウサギ、水に火がついた。
井戸が渇いた人々を押し流し、槍を棘がこわした。

eka nāi nau bachaṛā pañca duhebā jāi /
eka phūla solaha karaṇḍiyāṁ mālani mana maiṁ hariṣa na māi / 4 /
一頭の雌牛、九頭の仔牛、五頭が〔乳を〕搾り取る。
一房の花、十六個の花籠、庭師は心に喜びを抑えきれない。

pagāṁ bihūnaṛai corī kīdhī corī naiṁ āṁṇī gāī /
machindra prasādai jāti goraṣa bolyā dūjhai pāṇī na byāī / 5 / // 20 //
足を運ばず盗みをはたらき、盗んで雌牛を連れてきた。
マッツェーンドラの恩寵で行者ゴーラクは語った、〔その雌牛は〕二度と仔牛を産まなかった。＊

pāṇī の読みについて原著者は諸写本の読みが一致していないことを指摘して、paiṇi の読みを想定しているが、諸辞書に見当たらない。prāṇī と読めば「生き物」の意味となる。

goraṣa lo gopalaṁ lo gagana gāi duhi pīvai lo /
mahī biroli aṁmī rasa pījai anabhai lāgā jījai lo // ṭeka //
ゴーラクは牛飼い、虚空の雌牛の乳を搾って飲んでいる。
バターミルクを攪拌して甘露を飲み、無畏となって生きている。

mamitā bināṁ māi mui pitā bināṁ mūvā chorū lo /
jāti bihūṁnāṁ lāla gvāliyā ahanisa cārai gorū lo / 1 /
愛情がなくなり母が死に、父がいなくて子どもたちも死んだ。
生まれのない幼い牧童は、昼夜、牛たちを放牧している。

anahada sabadaiṁ saṁṣa bulāyā kāla mahādala daliyā lo /
kāyā kai antari gagana maṇḍala maiṁ sahajai svāmī miliyā lo / 2 /
奏でられざる音声の法螺貝を吹いて、カーラ（死神）の大軍を踏み倒した。
身体のなかの虚空界で、容易に主人（最高実在）を得た。

aisī gāvatrī ghara bāri hamārai gagana maṇḍala maiṁ lādhī lo /

ihi lāgi rahyā parivāra hamārā lei nirantari bāṁdhī lo / 3 /
このような雌牛が私の家の戸口に〔繋いであり〕、〔それは〕虚空界で手に入れた。
私の家族はこれ〔の世話〕に就いており、常に繋いである。

kānāṁ pūchāṁ sīṅga bibarajita barna bivarajita gāī lo /
machindra prasādai jatī goraṣa bolyā tahāṁ rahai lyo lāī lo / 4 / // 21 //
耳、尾、角がなく、色もない雌牛。
マッツェーンドラの恩寵で行者ゴーラクは語った、私はそこ（雌牛）に冥合している。

avadhū aisā gyāṁna bicārī tā maiṁ jhilimili joti ujālī // ṭeka //
遁世者よ、このような思考をした、その中に淡い光が見える。

jahāṁ joga tahāṁ roga na byāpaiṁ aisā pariṣa gura karanāṁ /
tana mana sūṁ je paracā nāṁhīṁ tau kāhe ko paci maranāṁ / 1 /
ヨーガのあるところに病は広がらず、このように見極め導師をつくれ。
心身をもって〔最高実在を〕覚知できなければ、何故、苦労するのか。

kāla na miṭyā jañjāla na chuṭyā tapa kari hūvā na sūrā /
kula kā nāsa karai mati koī jai gura milai na pūrā / 2 /
カーラ（死神）が消えず、揉め事もなくならず、苦行をしても勇者にはなれない。
家系を誰もこわすな、完璧な導師が見つからなければ。

sapta dhāta kā kāyā piñjarā tā māṁhi jugati bina sūvā /
sataguru milai to ūbarai bābū nahiṁ tau paralai huvā / 3 /
七つの要素でできた身体は鳥籠、その中で道理がなければ〔個我は〕鸚鵡。
正師が得られれば救われる、そうでなければ〔個我は〕破滅する。

kandrapa rūpa kāyā kā maṇḍaṇa aṁbirathā kāṁi ulīṁcau /

goraṣa kahai suṇauṁ re bhauṁdū araṇḍa aṁmīṁ kata sīṁcau / 4 / // 22 //
愛神カーマのような身体の飾り、〔それを〕無益な物となぜ捨て去るか。
ゴーラクは言う、聞け、愚か者よ、トウゴマの種に甘露で潤すようなもの。

āūṁ nahīṁ jāūṁ nirañjana nātha kī duhāī /
pyaṇḍa brahmaṇḍa ṣojaṁtā amhe saba sidhi pāī // ṭeka //
行くことも来ることもなし、無染なる主への懇願。
個我を梵卵に探しながら、私はすべての成就を獲得した。

kāyā gaṛha bhīṁtari nava laṣa khāī / dasavaiṁ dvāri avadhū tālī lāī / 1 /
身体という要塞に 90 万の塹壕があり、第 10 門に、遁世者よ、鍵が掛かっている。

kāyā gaṛha bhīṁtari deva dehurā kāsī / sahaja subhāi mile abināsī / 2 /
身体の要塞に神々、神殿、カーシー（聖地）があり、〔そこで〕いとも容易に不壊なるものが得られた。

badanta goraṣanātha suṇau nara loī / kāyā gaṛha jītaigā biralā koī / 3 / // 23 //
ゴーラクナートは言う、聞け、人間どもよ、身体の要塞に打ち勝つ者は稀なり。

pavanāṁ re tūṁ jāsī kaunaiṁ bāṭī /
jogī ajapā japai tribeṇīṁ kai ghāṭī // ṭeka //
気息よ、おまえはどの道を通って行くのか。
ヨーガ行者は命息念誦を合流点の岸で誦している。

candā goṭā ṭīkā karilai sūrā karilai bāṭī /
mūṁnī rājā lūgā dhovai gaṅga jamuna kī ghāṭī / 1 /
月の塊を石鹸にし、太陽を洗濯棒にせよ。
ムニ（ヨーガ行者）の王は、腰布をガンガー・ヤムナー川の岸で洗う。

aradhaiṁ uradhaiṁ lāilai kūñcī thira hovai mana tahāṁ thākīle pavanāṁ /
dasavāṁ dvāra cīnhile chūṭai āvā gavanāṁ / 2 /
下方〔の呼気〕と上方〔の吸気〕に鍵を掛ければ、意は落ちつき、そこで気息は止む。
第 10 門で覚知を得れば、去来はなくなる。

bhaṇanta goraṣānātha machindra nā pūtā jāti hamārī telī /
pīṛī goṭā kāṛhi līyā pavana ṣali dīyāṁ ṭhelīṁ / 3 // 24 //
マッツェーンドラの息子コーラクナートは語る、私のジャーティは搾油職人。
〔油の〕塊を搾って取り出し、気息という絞り滓を捨て去った。

avadhū gāgara kandahi pāṁṇīṁhārī gavarī kandahi navarā /
gharakā gusāṁī kautiga cāhai kāhe na bandhau jauṁrā // ṭeka //
遁世者よ、水壺の肩に水運び人が〔おり〕、ガウリー（白き女神）の肩にマングースが〔いる〕。
家の主人は見せ物を望む、なぜ猟師を縛らないのか。

lūṁṇa kahai alūṁṇāṁ bābū ghṛta kahai maiṁ rūṣā /
anila kahai maiṁ pyāsā mūvā aṁna kahai maiṁ bhūkhā / 1 /
塩は塩っぽくないと言い、ギーは私は乾いていると言う。
風は私は渇きで死ぬと言い、穀物は私は飢えていると言う。

pāvaka kahai meṁ jāḍaṇa mūvā kapaṛā kahai maiṁ nāgā /
anahada mṛdaṅga bājai tahāṁ pāṁgula nācana lāgā / 2 /
炎は私は寒くて死ぬと言い、衣服は私は裸だと言う。
奏でられざる太鼓が鳴っている、そこで跛者が踊り出した。

ādinātha bihavaliyā bābā machindranātha pūtā /
abheda bheda bhedile jogī badanta goraṣa abadhūtā / 3 / // 25 //
アーディナート（初祖）は困惑した、マッツェーンドラ（第二祖）の息子よ。

不二の秘密を解き明かせ、ヨーガ行者よ、遁世者のゴーラク（第三祖）は語る。＊

vihvala の派生形である bihavaliyā を原著者は「ブラフマンの明智を完璧に獲得した」の意味に捉えて、初祖アーディナートの修飾語句と理解している。また第１行後半句をゴーラクナートの修飾語句として理解し、第２行前半句も「不二の秘密を解き明かした」とし、その主語をゴーラクナートと解釈しているが、この解釈は詩形を無視したものと言わざるを得ない。

avadhū ahūṁṭha parabata maṁjhāra belaḍī māḍyau bistāra /
belī phūla belī phala beli achai motyāhala // ṭeka //
遁世者よ、3.5 腕尺の山のなかに、蔓草がたいへん広がっている。
蔓草が花咲き蔓草の実がなり、蔓草〔のうえ〕に真珠がある。

siṣṭi utapanīṁ belī prakāsa mūla na thī caṛhī ākāsa /
uradha goḍa kiyau bisatāra jāṁṇa nai josī karai vicāra / 1 /
世界が生じた、蔓草の光輝〔から〕、〔その蔓草には〕根がなく虚空まで伸びている。
上方の牛舎まで広がっている、知者の占星術師よ、〔このことに〕思慮を廻らせ。

āīsau bhīla pāradhī hātha nahīṁ pāī pyaṅgulo muṣa danta na kāhīṁ /
hayoṁ hayoṁ mṛghalau dhuṇahīṁ na tahīṁ
ghaṇṭā sura tihāṁ nāda nāhīṁ / 2 /
このようなビール族の猟師がおり、その手はなく跛者であり、口に歯がない。
彼には鹿を撃つ弓がなく、〔鹿を呼び寄せる〕鈴、声に音がない。＊

第２行目冒頭の hayoṁ は意味不明だが、現代語 hāya を想定すれば「嗚呼」の意味になる。また、dhuṇahīṁ の読みは原著者のように dhanuhī を採るのが適切と思われる。

bhīlaṛai tihāṁ taṇiyau bāṁṇa mana hīṁ mṛghalau bedhiyau pramāṁṇa /
hayauṁ hayauṁ mṛgalau bedhiyau bāṁṇa
dhuṇa hī bāṁṇa na thī sara tāṁṇa / 3 /
ビールはそこで弓を引き、意という鹿を見事に射貫いた。
弓矢は鹿を射貫いたが、矢を番えた者の弓も矢もなかった。

bhīlaṛīṁ mātaṅgī rāṁṇī mṛghalau āṁṇīṁ ṭhāṁṇīṁ /
caraṇa bihūṇauṁ mṛghalauṁ āṁṇyauṁ sīsa sīṅga muṣa jāi na jāṁṇyau / 4 /
ビール族の酔い痴れた王女は、〔自分の〕所に鹿を運んだ。
〔その王女はその〕足のない鹿を運んだ、〔その鹿は〕頭、角、顔〔何もか〕も見分けられなかった。

bhaṇata goraṣanātha machindra nāṁ pūtā māryo mṛgha bhayā avadhūtā /
yāhi hiyālī je koī būjhai tā jogī kauṁ tṛbhuvana sūjhai / 5 / // 26 //
マッツェーンドラの息子ゴーラクナートは語る、殺された鹿が遁世者になったと。
このことを心で理解できるヨーガ行者は、三界を理解できる。

avadhū aisā nagra hamārā tihāṁ jovau ūjū dvāraṁ /
aradha uradha bajāra maḍyā hai goraṣa kahai bicāraṁ // ṭeka //
遁世者よ、私の街はこのようだ、その門を見よ。
上方（吸気）と下方（呼気）の市場が賑わっている、ゴーラクは言う、考えよ。

hari prāṁṇa pātisāha sāha vicāra kājī /
pañca tata te ujahadāraṁ mana
pavana doū hastī ghoṛā gināṁna te aṣai bhaṇḍāraṁ / 1 /
ハリ（主）は気息の皇帝のなかの皇帝、カーズィー（法官）が思考。
５元素は宰相であり、意と気息のふたつは象と馬で知識は無尽の倉庫。

kāyā hamāraiṁ sahara boliye mana boliye huja dāraṁ /
cetani paharai koṭavāla boliye tau cora na jhaṁkai dvāraṁ / 2 /

身体がわれわれの街とすれば、意は衛士。
意識が巡回する衛士長であれば、盗人は戸口を覗けない。

tīnisai sāṭhi corā ghaṛha racīle solaha ṣaṇilai ṣāī /
nava daravājā paragaṭa dīsai dasavāṁ laṣyā na jāī / 3 /
360 人の盗人が要塞を築き、16 本の塹壕を掘った。
9 の門が開いているのは見えるが、第 10 門が見えない。＊

原著者によると、この詩句の象徴表現はナート派の *Mūlagarbhāvalīgrantha* に基づくもので、360 とは身体の骨の数であり、16 とは身体の各処、第 10 門は頭頂のブラフマ・ランドラを指す。

aṭhāraha bhāra koṭa kaṭhaṁjarā lāilai bahatara koṭhaḍī nipāī /
nava sutra ūparai jantra phirai taba kāyā gaṛha liyā na jāī / 4 /
18 のバール（約 100 kg）の材木が要塞に運ばれ、72 の部屋が作られた。
9 門のうえに紐を掛ければ、身体の要塞は奪われない。

anahada ghaṛī ghaṛiyāla bajāi lai parama joti dui dīpaka lāī
kāma krodha doi garadani mārilai aisī adalī pātisāhī bābai ādama calāī / / 5 /
奏でられざる鐘を叩き役が打ち鳴らせば、至高の光輝の灯明二つが輝き出す。
愛欲と怒り二つの首を押さえろ、こうした教令をアーダム王は執行した。

tahāṁ satya bībī santoṣa sahījādā ṣimāṁ bhagati dvai hāi /
ādinātha natī machindra nātha pūtā kāyā nagarī goraṣa basāī / 6 / // 27 //
そこに真実の王妃と満足という王女、寛容と帰依の二人の兄弟〔がいた〕。
アーディナートの孫、マッツェーンドラの息子ゴーラクナートは、身体の街を造った。

īkīsa brahmaṇḍa bhāṭhī cigāvai pīvata sadā mativālaṁ /
manasā kalālini bhari bhari devai āchā āchā mada nāṁ pyālaṁ // ṭeka //
21 の梵卵に〔蒸溜〕炉が築かれ、〔ヨーガ行者は甘露を〕飲んで常に酔

い痴れている。
意欲という酒造り女が、上等な酒を椀に注いでくれる。

amṛta dāṣī bhāṭhī bhariyā tā madhaiṁ guṛu jhakolyā /
mana mahuvā tana dhāhuvā banāsapatī āthārai melyāṁ / 1 /
甘露のブドウが炉を満たし、そのなかに黒砂糖が吹きつけられた。
意というマフアー（酒）が身体を壊し、18 種の植物（ハーブ）が混ぜられた。

bhramara guphā maiṁ mana thari dhyānaiṁ baisyā āsaṇa bālī /
cetani rāvala yaha bhari chākyā juga juga lāgo tālī / 2 /
蜂の洞窟（ブラフマ・ランドラ）に心を止めて、幼児（ヨーガ行者）は体位を定めた。
意識（アートマン）という王はこれ（甘露）を満喫し〔のち〕、なんユガにわたって鍵を掛けた。

tṛkuṭī saṅgama kṛpā bhariyā mada nīpajyā apāraṁ /
kusamala hotā te jhaṛi paṛiyā rahi gayā tahāṁ tata sāraṁ / 3 /
眉間の合流点に恩寵が満ち、無上の喜び（酒）が生じた。
罪障があったが取り除かれ、そこには真実の精髄が残った。

evahāṁ mada śrī goraṣa kevaṭyā badanta machīndra nā pūtā /
jini kaivaṭya tini bhari bhari pīyā amara bhayā avadhūtā / 4 / // 28 //
そこに聖ゴーラクナートは酒をもたらした、とマッツェーンドラの息子は語る。
〔酒を〕もたらした者は充分飲んで、不死となった、遁世者よ。＊

kevaṭyā の意味は、原著の語彙集の解釈に従った。

sati sati bhāṣanta śrī goraṣa yogī ame tau rahibā raṅgai /
aleṣa purisa jini gura muṣi cīnhyāṁ rahibā tisakaiṁ saṅgaiṁ // ṭeka //
聖ゴーラク・ヨーガ行者は真実のみを語る、私は〔自己の〕色に染まっ

ていると。
不可視なプルシャ（存在者）を師資面授によって覚知した者は、それと供にいなければならない。

satajuga madhe juga eka racīlā bisahara eka nipāyā /
gyāṁna bihūṇāṁ gaṇa gandhrapa avadhū saba hīṁ ḍasi ḍasi ṣāyā / 1 /
サティヤ・ユガでは一つ目のユガを創造し、毒蛇を一匹産んだ。
知識のないシヴァ神の眷属、ガンダルヴァ、遁世者、〔それら〕みなを〔その蛇は〕噛みつき食べた。

tretā juga madhe juga doi racīlā rāma ramāiṁṇā kīnhāṁ /
nara bandara saba laṛi laṛi mūye tina bhī gyāṁna na cīnhāṁ / 2 /
トレーター・ユガでは二つ目のユガを創造し、ラーマがラーマーヤナを成した。
人、猿みな戦い戦って死んでしまい、彼らも知識を覚知できなかった。

dvāpara juga madhe juga tīni racīlai bahu ḍambara bahu bhāṁra /
kairauṁ pāṇḍau laṛi laṛi muye nārada kīyā saṅghāraṁ / 3 /
ドヴァーパラ・ユガでは三つ目のユガを創造し、多くの虚偽と多くの〔罪の〕重荷〔ができた〕。
カウラヴァ族とパーンダヴァ族は戦い戦って死んでしまい、ナーラダ仙が後始末をした。

kalijuga madhe juga cāri racīlā cūkilā cāra bicāraṁ /
ghari ghari dandī ghari ghari bādī ghari ghari kathaṇa hāraṁ / 4 /
カリ・ユガでは四つ目のユガを創造し、行いと考えが逸れてしまった。
家々で争い、家々に敵、家々で殺害と略奪。＊

第 2 行目後半句の原語 kathaṇa は脈絡上意味が通じないので、kadana の読みを提示する。

cauhu juga madhe juga cāri thāpilā gyāṁna nirālamba rahiyā /

machīndra prasādaiṁ jatī goraṣa bolyā koī biralā pāra utāriyā / 5 / // 29 //
四ユガのなかに四つのユガを創ったが、知識に基づかないものだった。
マッツェーンドラの恩寵によって行者ゴーラクは言った、稀なる者しか彼岸に渡れなかった。

aisā jāpa japau mana lāī sohaṃ sohaṃ ajapā gāī // ṭeka //
このような念誦を行え、専心して、「それは我なり、それは我なり」という命息念誦を唱えて。

āsaṇa diḍha kari dharau dhiyānaṁ ahanisa sumirau brahma giyānaṁ /
jāgrata nyandrā sulapa ahāraṁ kāma krodha ahaṃkāra nivāraṁ / 1 /
体位（坐）を固定して禅定に集中し、日夜、ブラフマンの知識を憶念せよ。
睡眠中に覚醒し、少量の食物〔摂り〕、愛欲、怒り、自我意識を除去せよ。

nāsā agra niju jyau bāī iṛā pyaṅgulā madhi samāi / 2 /
鼻端に自己の個我、気息〔が集中し〕、イラー脈管がピンガラー脈管のなかに収まる。

chasai saṃhasa ikīsauṁ jāpa anahada upajai āpahi āpa /
baṅka nāli maiṁ ūgai sūra roma roma dhuni bājai tūra / 3 /
2160,000〔回の命息〕念誦〔をすれば〕、奏でられざる〔ナーダ〕音が自然に生じる。
曲がった脈管（スシュムナー）に太陽が昇り、体中にナガーラー（太鼓）が鳴り出す。

ulaṭai kamala sahaṁsradala bāsa bhramara guphā mahi joti prakāsa /
machindra pratāpa jatī goraṣa kahai parama tatta koī biralā lahai / 4 / // 30 //
逆さまの千弁の蓮華の住居、蜂の洞窟（ブラフマ・ランドラ）に光が輝く。
マッツェーンドラの栄光によってゴーラクは言う、最高の真実は稀なる者しか得られない。＊

第 2 行目の読みは、原著に示されている写本 B の読みに一部修正を加えて採用した。

jāgā jogī kanaka rāvaliyā gurudeva meṁhalau būṭhau /
ṣojantā ṣojantā sataguru pāyā sahajaiṁ naiṁ bhāvai tūṭhau // ṭeka //
ヨーガ行者カナカ王は目覚め、導師様が雨雲のように〔恩寵の〕雨降らす。
探し探し続けて正師が得られ、〔かれは〕自然に満足した。

第 1 行目前半句の「王」と訳した原語 rāvaliyā を、原著者はこの派のヨーガ行者の一派の名称と解説しているが、訳者は現段階では未確認である。

utara desa maiṁ meṁha dhaṛakyā dakṣiṇa ācala chāyā /
pūraba desa thīṁ pāṇiga bichūṭī pachima khetra maiṁ pāyā / 1 /
北の国で雨雲が雷鳴し、南の裾野に影をおとす。
東の国から雨が降り出し、西の畑に〔雨が〕届く。

mana pavanā dhorī jotāvo satanāṁ sāṁtīṛā samadhāvo /
dayā dharma nāṁ bīja aṇāvo iṇīṁ pari ṣetre jāvo / 2 /
意、気息という雄牛を〔軛に〕繋ぎ、真実という綱できちんと縛れ。
憐憫と正義の種子を持ってきて、そして畑に行け。

ṣātāṁ na ṣūṭai detāṁ na niṭhai jama bāra nahīṁ jāi /
machindra prasādai jatī goraṣa bolyā nita naveraṛauṁ thāi / 3 / // 31 //
〔その畑の稔りは〕食べても尽きず、与えても無くならず、ヤマ（閻魔）の門に行くことなし。
マッツェーンドラの恩寵によって行者ゴーラクは言った、〔その稔りは〕常に新鮮であろうと。

jīva sīva nā saṅgai bāsā nā badhi ṣāibā re rudhra māsā // ṭeka //
ghāva na ghātibā haṃsa gotaṁ badanta goraṣanātha nihāri potaṁ / 1 /
個我はシヴァ神とともに住しているので、殺害して血と肉を食べてはな

らない。
ハンサ鳥（アートマン）と同族の者を傷つけてはならないと、ゴーラクナートは動物の子供を見て言う。

māribā re narā mana drohī jākai bapa baraṇa nahīṁ māsa lohī / 2 /
人間よ、意という敵を殺せ、それには身体、色、肉、血もない。

saba jaga grāsiyā deva dāṇaṁ
so mana mārībā re gahi guru gyāṁna bāṁṇa / 3 /
神、悪魔〔など〕全世界を捕らえた、その意を射ろ、導師の知識という矢を執って。

basū kyā hatiye re pyaṇḍa dhārī māriye
pañca bhū mṛghalā je carai budhi bāṛī /
joga kā mūla hai dayā dāṁna
bhaṇanta goraṣanātha ye brahma gyaṁnaṁ / 4 / // 32 //
なんのために肉体を持つ者たちを殺すのか、
五大元素の〔意という〕鹿を殺せ、統覚という庭を荒らしてしまうから。
ヨーガの根本は憐憫の布施だと、ゴーラクナートは、このブラフマンの明智を説く。